ノンフィクション：蓮舟田邉太一のつぶやき（2）
～　翁の著書「幕末外交談」から　～

2011年10月14日
田邉康雄

前回予告したように、まず幕末外交談の原文の一部を紹介します。出典は、1998(明治31) 年に発行された幕末外交談の初版本です。祖父田邉朔郎が田邉太一から貰いました。そして筆者が相続しました。巷ではこの本の現存が確認されていないので、幻の「幕末外交談の初版本」だそうです。

―― 手始めに「まえがき」部分を紹介します。ここには、以下のような著作の経緯が記載されています。原文を尊重して縦書きとし、かつ、使用漢字も旧字体をそのまま紹介しました。改行の位置も原文のままです。漢学者田邉石庵を父に持ち、父親が教授をする幕府昌平坂学問所で秀才を謳われた人が書いた文章ですから、漢文を思わせます。しかしさほど読解困難な文章ではありませんから、これを現代文に翻訳することは差し控えます。第一、翻訳してしまっては、迫力がなくなります。

自序

(1)予の謁を幕府に釋しは實に其外国事務衙門に在り(2)中間譴を蒙りて屏居せし事ありといへとも幾もなく(3)故に復して以て其終りに到れりされは予の譾劣を以てするも幕府外交の事實に於てはやゝ(4)通曉する所あり世に幕末の事を記するの書たゝに十百のみならす然れとも紕繆相望外交の事に於て殊に其甚だしきを見る遂に自らはからす(5)一史を著して信を後世に傳へんとの志ありしも老懶これを果し得す先年知友のすゝめにまかせ(6)予の憶記するまゝを筆し一章一篇成に隨て讀賣新聞に報してこれを世に問ひしことありしか今又これを輯録し更に刪補する所あり以てこの書をなすにいたれり但事予の耳目の見聞する所に(7)局して其全豹を描くに及はす又往々臆見を以て時勢を揣摩しこれか説をなすものあり然れとも誇張に渉らす掩飾を事とせす直筆誼むところなきは自から信する所なり幸に幕末資料の一に供るを得は庶幾は宿志の萬一を償ふに足らんか

田邉太一識す

最初にこの自序の部分に沿って太一の気持ちを吐露すると以下のようになります。数字(1)～(7)は、「自序」の枠上に打った数字に対応しています。

(1)予の謁を幕府に釋しは實に其外国事務衙門に在り
私は幕臣儒学者の次男に生まれた。家は200石の幕臣であったが、兄の厄介の身であった。徳川幕府において役職は世襲であり、これにつかないと俸禄はなかった。しかし昌平坂学問所から甲府徽典館教授になり、そして長崎海軍伝習所で力をつけたので1859(嘉永6)年に外国奉行所の書物方出役を命ぜられ、1861(文久1)年に28歳で最初俸禄30俵の身分取立て沙汰をうけた。

© 2011 Y. Tanabe

(2)中間譴を蒙りて屏居せし事ありといへとも幾もなく故に復して以て其終りに到れり
私は二度も役目を解かれた。自分のことより国家のことを考えた結果だ。最初は横浜閉鎖を言いに池田使節団の組頭としてパリに随行したとき。二度目は徳川昭武パリ万博使節に随行したとき。閉門蟄居を命ぜられたが、形の上だけで済んだ。そして江戸城無血開場の最終決定会議を徳川慶喜の前で小栗上野介等徹底抗戦派とともに勝海舟の無血開城派と対峙した。

(3)されは予の譾劣を以てするも幕府外交の事實に於てはやゝ通曉する所あり
外国奉行は1858(安政5)年以來1868(明治1)年までの10年間に、定員3〜4名とは言え、60人が入れ替わり立ち代わり就任している。最長在任奉行は3年間でしかない。要職は家格の高い幕臣の世襲制だから致し方ない。私はこの10年間継続して外国奉行所に在籍した。その6年間は組頭という実務の長だった。だから幕府外交の生き字引である。

(4)世に幕末の事を記するの書たゝに十百のみならす然れとも紕繆相望外交の事に於て殊に其甚だしきを見る
薩長が歴史を歪曲した。薩長政府を批判する記事を書いたものは逮捕されるなど言論統制がきびしかった。よって戊辰戦争のことは、薩長は善、徳川は悪という視点で整理される始末である。とくに外交事情に関しては歪曲と捏造が甚だしい。弱腰外交をやった徳川幕府の負の遺産を薩長が後始末したということになっている。勝てば官軍というが、薩長はとくに著しい。

(5)遂に自らはからす一史を著して信を後世に傳へんとの志ありしも老懶これを果し得す
いたたまれず重い腰を上げ、とくに具体的計画をした訳でもないが、幕末外交史を書いて後世の人々の判断にまかせようとの志を立てたが、寄る年波には勝てず、悶々としてきた。外国奉行所時代の同僚で失意の福地源一郎とともに吉原を豪遊したのも、そのはけ口を求めたものだった。福沢諭吉と成島柳北の先生に対して、福地とともに御前様として花柳界を風靡した。

(6)先年知友のすゝめにまかせ予の憶記するまゝを筆し一章一篇成に隨て讀賣新聞に報してこれを世に問ひしことありしか今又これを輯録し更に删補する所あり以てこの書をなすにいたれり但事予の耳目の見聞する所に局して其全豹を描くに及はす
友人が田兄やってくれと強く勧めるので、老いの身に鞭打って思い出しながら少しずつ書いた。そして新聞に連載記事を書いた。今回は、この連載をまとめて一冊の本にした。その際、さらに書き足した。ただし書いたことはすべて自分が見聞きした範囲の事象に限定されているので、これが幕末外交の全部であるということにならない。私見をお許し願いたい。

(7)又往々臆見を以て時勢を揣摩しこれか説をなすものあり然れとも誇張に渉らす掩飾を事とせす直筆諱むところなきは自から信する所なり幸に幕末資料の一に供るを得は庶幾は宿志の萬一を償ふに足らんか
世間には自分の独断でもって過去の出来事の意味を断定し、それを正しいと主張するものがある。しかし私は事実の誇張はしていない。飾り立てることもしていない。このことは神仏に誓う。だからこの書を幕末外交事情だけでなく、幕末の幕府事情に係る資料として提供できたことは、これまで悶々としてきた胸の中が少しは晴れる思いである。幕末史として見てほしい。

―― 太一は、父石庵譲りで漢学の大家ですが、国学は得意でなかったのでしょう。古文法の使い方に一部意味不明な箇所があります。例示すると「これを世に問ひしことありしか」で、已然形でとまっています。私は浅学の身にしてあまり自信はありませんが、高校時代に習った古文法によると、正しくは終止形「これを世に問ひしことありき」、「こそ」をつけて強調して「これを世に問ひしことこそありしか」、あるいは何か体言をつけて「・・・ありしかど」でなければならないと思います。このままですと意味が私には判然としません。また「遂に自

らはからす一史を著して」は意味不明です。「自らはからすも・・・」ならば分からない気もしません。「一方、終止形に「ら変」の「り」を多用しているのは癖でしょうか。

―― この序文の裏にある太一の心を読んで、筆者田邉康雄が太一に代わってその心情を「つぶやき」の形で紹介します。すでにその心情は、拙著「びわ湖疏水にまつわる、ある一族のはなし」の第五章と第六章において太一に代わって吐露していますが、今回は日頃太一に対して共感している部分をさらに吐露しました。その時点は、本著書の出版時、1998（明治31）年に限定はしていません。今生きていたら言ったであろうことを私が阿弥陀如来様のお像の前で念仏しながらキャッチして吐露しました。

―― これを書いている私田邉康雄は、太一の養子田邉主計の甥です。主計は太一の甥（私にとっては祖父）田邉朔郎の次男です。主計には子がいなかったので私を含む甥姪6名、そしてその子14名、孫15名が太一の正統な子孫です。この他に太一の娘、田邉龍子が嫁にいった三宅雪嶺の子孫がいます。こちらの方がＤＮＡ的には太一に近いです。なお龍子は最初は田邉花圃、後に三宅花圃として明治の文壇に名を残しました。太一は東京青山墓地の田邉家の墓に埋葬されています。三宅家と田辺家の墓地はとなり合わせに建っています。

―― 話変わって1947年(昭和22)年、小学校五年の時に担任の先生から命ぜられました。祖父田邉朔郎のことをクラスで紹介せよと。そこで朔郎が残した書斎に親の目を盗んで侵入し、文献を漁りました。その中に真下吾一著「琵琶湖疏水物語」があり、岩倉遣米欧使節団の一等書記官筆頭だった田邉太一を田邉朔郎が横浜で出迎えに行ったことが記述されていました。以来64年間、田邉太一と岩倉遣米欧使節団は、私の気になる存在となりました。

―― 1970(昭和45)年頃から本業の化学エンジニアの仕事の傍ら、少しずつ調査してきました。以下は私が心で聞いた太一のつぶやきです。ひとコマひとコマずつが独立していますから、どこからお読みいただいても結構です。独立している分だけ、コマ間に重複があることはお許しください。

―●○●―

戊辰戦争に関して田邉太一はつぶやく

＜維新ではない。武力革命だ＞

薩長政府は明治“維新”と名づけているが、実際は明治”武力革命“だった。地方に住む下級武士が中央に住む上級武士に挑んだ革命だった。国民の大多数を占める農民、職人、それに商人は参加しなかった。即ち国民の5%以下を占めるに過ぎない武士の間の武力闘争だった。その結果、中央と地方の政権交代が起こった。徳川幕府が薩長政府に置き換えられたに過ぎない。

＜江戸城無血開城＞

江戸城明け渡しの時は、私は目付だった。将軍の前で発言できるなど、厄介の身から大変な出世である。勘定奉行小栗忠順(上野介)の側につき、勝海舟の無血開城派と対峙し、薩長に対して徹底抗戦を主張した。それまでに取った国益優先の行動と矛盾しているが、パリ万博出品の際、薩摩の独立旗を掲げるなど汚いやり方に憤慨した結果だ。薩摩だけは許せない。

＜小栗上野介と近藤勇＞

私は親しい榎本、大鳥、荒井の三人と組んで小栗側に立ち、薩長に弓引いた。敗れた三人は幕府艦隊を率いて北海道函館でなおも弓引いた。しかし小栗上野介は、帰農して恭順した。これを薩長は捉えて斬首した。京都で薩長を殺戮した新撰組の近藤勇を捉えて斬首したが、国家を思う公憤の小栗と武士に出世することを夢見た私欲の近藤を同列に見るなど薩長は許せない。

―●○●―

函館戦争に関して田邉太一はつぶやく。

＜私の関与＞

函館戦争では榎本武揚が總裁、大鳥圭介が陸軍総司令官、そして荒井郁之助が海軍総司令官だった。私は横浜に残って軍資金調達をしていた。榎本武揚は父石庵の私塾生だった。また長崎海軍伝習所で一緒だった。大鳥圭介は幕府陸軍で兄田邉孫次郎と交友があった。荒井郁之助は義兄である。こんな近い関係の者が集まって対薩長函館戦争をやったのだ。

＜五稜郭の戦い＞

榎本等の狙いは北海道に幕臣独立国家を作ることだった。私の幕府時代の「国益優先」という信条には背くが、戊辰戦争における薩長の、とくに薩摩の卑劣なやり方と旧幕臣に対する不当な処遇に憤慨していた私には“時の勢い”だった。憎い薩摩ではあるが、薩摩の黒田が榎本、大鳥、荒井を許したことは意外。意気に感じた三人は明治政府に幕府時代の知恵を伝承した。

＜薩長に弓引いた三人のその後＞

勝海舟の伯爵には及ばないが、榎本は子爵、大鳥も男爵と華族に列せられた。荒井は中央気象台長となった。函館戦争が薩長ではなく「低気圧に負けた」との思いから気象学に入ったもの。私も外務省で使ってもらい、勅撰貴族院議員にしてもらった。新政府は旧幕府のテクノクラートを上手に利用した。これは江戸城無血開場の賜物だろう。徹底抗戦をしないでよかった。

―●○●―

岩倉遣米欧使節団に関して田邉太一はつぶやく。

＜薩長の意気込み＞

徳川幕府時代の外交は何をやっていたのか。不平等条約を結ぶとは、なんという弱腰だったのか。だから自分達でそれを正してやる。これが岩倉遣米欧使節団の意気込みだった。事実幕府外交の生き字引、私の出番はなかった。私達随行書記官の役目は“台所の切り盛り”に過ぎなかった。私はそのように感じ、命ぜられた事務以外には手をださなかった。

＜パリ万博使節団の通信≫

私は1867(慶應3)年のパリ博覧会徳川昭武使節団の組頭だった。その時、持参した運営資金がなくなり、逆為替を組んで日本から送金してもらった。当時はパリから上海まで電信が通じていた。上海から江戸までは船を利用した。これで逆為替が成立したのだ。そういう実務経験を持っていた私が、実務未経験の薩長政府から頼まれればいやとは言えず事務方を引受けた。

＜岩倉遣米欧使節団の通信＞

使節団が1872(明治5)年にニューヨークから打電した電報は、大西洋経由で欧州、インド、上海を経由して5時間で長崎に着いた。そこから江戸までは馬の便で３日かかった。帰国した1873(明治6)年には、長崎～東京間が開通した。だから使節団と東京とのテレコミニュケーションには不自由しなかった。裏方の書記官がこれを担当した。このために書記官を引受けた。

＜発案は大隈重信＞

大隈重信は長崎でフルベッキの薫陶をうけ、実際に新政府の要人が西洋事情を見聞することの重要性を理解した。私は具体的な計画立案を依頼され大隈に提出した。大隈はこれを三条実美太政大臣に上申しようとした。ところが大久保がこれを横取りし、大隈を外して薩摩に近い右大臣岩倉を担ぎだし、遣米欧使節団を編成した。藩閥間の抗争であるが私には関係ない。

＜留守番＞

維新戦争が終結してからまだ日が浅い。政府の要人、大久保、大隈、大木、伊藤、寺島、山縣、黒田、西郷、川村、山田の中から、大久保と伊藤の二人が二年近くも外遊すると国内で再び戦争が起こる危険がある。この押さえを大久保は、戊辰戦争の盟友西郷兄弟に託した。隆盛は陸軍大将第一号、そして従道は海軍大将第一号であり、この二人で大久保のために留守を守った。

＜幕府外交の大成果＞

幕府時代の外交は、決して弱腰ではない。よく勉強してこい。これが偽らざる気持ちだった。間宮林蔵が島であることを発見した樺太と移民が多く出て行ったハワイは、ロシアとアメリカにやられたが、しかし国後/択捉を含む北海道、西南諸島を含む沖縄、對馬、小笠原諸島を守った。日本本土が欧米の殖民地にされることを完全に防止した。アジア唯一の快挙である。

＜明治薩長政府の外国事務所＞

遠く西から江戸へ攻めあがってきた薩長政府は、1869(明治2)年に外務省をつくったが、自力でこれを運営できるわけがない。第一、それまでに外国と交わした約束がある。だから外務省は、幕府外国奉行所の事務をそっくり引き継がざるを得なかった。そしてその事務を担当していた幕府の人材を必要とした。幕府外交実務のトップ、生き字引の私も必要とされた。

—●○●—

岩倉遣米欧使節団の成果に関して田邉太一はつぶやく

＜使節団の副産物＞

岩倉遣米欧使節団は“主目的”に対して何ら成果はなかった。当たり前だ。しかし「国力がないと対等な話し合いはできない」。このことを薩長政府が知ったことは、副産物として大きな成果だった。さらに「国力とは工学だ」と理解したことも大きな成果だった。伊藤がエンジニアの育成に着手したことは大成果だった。甥朔郎はこの枠組みに乗って家名再興に成功した。

＜使節団の立派な大変身＞

岩倉具視が右大臣を捨てて未知数の日本鉄道の社長になろうと言い出したこと、並びに伊藤博文が他の要職を捨て工部卿に就いたのは立派だ。一行は岩倉が自慢の髷をきるなど旅行中に変身した。五稜郭の戦いで薩長軍に投降した大鳥圭介は「我を恥じ白骨を青沙に曝す」といっていたが、使節団に加わった後に一念奮起して工部大学校の校長を引受けた。

＜西洋の技術事情＞

私は長崎海軍伝習所においてオランダ人教師から航海術、造船学、機関学、算術等を正式に習ったエンジニアである。加うるに２度パリへ公務出張し、フランス軍艦や商船、鉄道列車に乗った。だから西洋技術事情には詳しい。長州ファイブの伊藤はそうではなかったが、岩倉、大久保は驚いた。素直に驚いたところが感心である。これにより、使節団の新使命は決まった。

＜国力は工学＞

お隣の清国は、外国から軍艦/大砲を購入して「国力」をつけようとした。これに対して薩長政府は、軍艦/大砲をつくるエンジニアを育成しようとした。薩長にしては慧眼である。伊藤はよくやった。産業革命の重工業の中心地、スコットランドのグラスゴー大学から新進気鋭のエンジニアを招聘して工部大学校を創設した。我が国エンジニア教育の原点である。

© 2011 Y. Tanabe

＜甥田邉朔郎の成功＞

私は甥田邉朔郎にエンジニアになることを勧め、朔郎は工部大学校へ進学した。卒業後直ちに京都びわ湖疏水工事を担当して見事完成させた。日露開戦前にロシア軍の参謀アバダスチはこれを見て「日本は工学が進んでいる。あなどってはいけない」と本国に打電した。日露戦争は工学の勝利である。電信用ＧＳ蓄電池、Ｂ＆Ｓ距離測定器、伊集院信管、下瀬火薬などで。

―●○●―

京都の命の水、琵琶湖疏水に関して田邉太一はつぶやく

＜榎本/大鳥/荒井と朔郎＞

榎本、大鳥、荒井の三人は甥朔郎の面倒をよく見てくれた。大鳥は工部大学校長として。荒井は大鳥の朔郎に対する卒論テーマの相談に乗ってくれた。榎本は文部大臣のとき朔郎の結婚媒酌人となってくれた。びわ湖疏水はこの三人が朔郎にやらせたようなものだった。幕府時代の縁が世紀の大土木事業を推進したとも言える。親戚縁者の絆だ。

＜長州軍北垣国道＞

甥朔郎の嫁静子は鳥取藩士北垣国道の長女だ。国道は1863(文久3)年、農兵を募って生野代官所を武力襲撃し、明治維新戦争の引き金を引いた。戊辰戦争では、長州旗下鳥取藩八番隊長として実戦に参加し、幕府を攻撃した。幕臣の朔郎にとっては憎い敵である。しかし維新戦争後20年余りにして早くも仲直りした。会津藩と長州藩は平成になって初めて仲直りしたのに。

＜びわ湖疏水の立案推進者北垣国道＞

甥朔郎が卒業論文に書いた琵琶湖疏水を、朔郎がそのまま工事推進したかのように伝えられているが気恥ずかしくて面映い。長州閥北垣国道が京都府知事時代にやったものだ。しかし北垣は自分の手柄を娘婿朔郎に譲った。北垣国道は、徳川幕府のテクノクラート、榎本、大鳥、荒井、田辺のお陰で男爵、正二位に出世したことを恩義に感じてくれたものと思う。

―●○●―

薩長が無視した徳川時代の遺産に関して田邉太一はつぶやく。

＜徳川時代は　闇ではなかった＞

明治の近代化の基礎は、すでに徳川時代にできていた。明治の文明開化は幕府265年間に蓄積された強大な土台の上に積み重ねられたもの。薩長政府が自分達は欧米の知識を導入して成功させたと主張しているが、それは手柄の横取りだ。歴史は常に勝者が描く。明治維新も非例外。私は地道に学問の積み上げをやってきた幕臣学者家の子孫の立場からこのように主張する。

＜ユニークな天皇制＞

徳川時代は、すでに世界有数の科学技術保有国だった。これが他国に例を見ないユニークな天皇制の下で平和裡に明治時代に継承され、薩長が文明開化と称する急速な発展を遂げた。天皇制のお陰である。しかし薩長藩閥政府はそのことを隠蔽した。今回は結果が悪くはなかったから許容範囲に入るが、将来天皇制を私利私欲に利用して悪い結果を人がでることを危惧する。

―●○●―

政権交代システムとしての天皇制に関して田邉太一はつぶやく。

＜天皇制の悪用＞

薩摩は汚い手をつかう。岩倉を抱きこんで偽の錦旗を立てた。多くの国民が敬う、ユニークな世界に誇る天皇を悪用した。こんな政府に協力することは嫌で沼津に引き込んで、徳川家兵学校教授をしていたが、何度も使者がくるので、折れて外務省に出所した。生活のためという意味が大きい。遣米欧使節団に協力したが、岩倉や大久保と同じ船に乗ることは嫌だった。

＜薩摩による天皇家の利用＞

薩摩は天皇を利用した。島津久光の子、薩摩藩主島津忠義の娘倪子を、陸軍元帥久邇宮邦彦王に嫁がせ、その子良子を大正天皇の子、皇太子（後の昭和天皇）に嫁がせた。鎌倉時代から名目的地位にとどまっておられた天皇家を政治に担ぎだして利用した。天皇家を自分達の悪行の隠れ蓑とした。今後の世の中において天皇家をさらに悪用する者がでないこと切に祈る。

＜阿弥陀如来様の御許から昭和を嘆く＞

薩長軍の伝統を引き継ぐ昭和の軍閥も天皇制を悪用した。統帥権などと称し、陸海軍は天皇直属であって、内閣の指示を受けないなどと勝手な理屈をつくった。兵隊に対して「上官の命令は天皇陛下の命令である」と嘯いて多くの将兵に無理な作戦を強要して悲惨な死に追いやった。戦闘で死ぬならまだしも、無理な計画の下で餓死した将兵が少なくとも30万人は存在した。

—●○●—

外国奉行所時代の自分の行動に関して田邉太一はつぶやく。

＜幕府外国奉行所＞

私は長崎から江戸に戻り林大学頭の周旋によって外国奉行所に職を得た。ペリー来航の直後だったので仕事は山ほどあった。最初は、記録を作成したり、原案を書き写したりの単純な仕事だったが、次第に自分の考えで進めるような仕事をもらった。そしてスピード出世して父石庵と同額俸禄200石取りの組頭になった。厄介の身から晴れて幕臣である。徳川には恩義がある。

＜国益優先＞

昌平坂学問所で得た世界情勢に関する知識と長崎海軍伝習所で得た欧州の技術知識が役に立った。鎖国を続けていたら、欧米列強の植民地にされることは火を見るよりも明らかだった。薩英戦争と長州四カ国戦争は、これらの処置を幕府が誤ると清国のアヘン戦争の二の舞となるところだった。尊王攘夷を振りかざす薩長を抑えて列強と上手に交渉したのは幕府だった。

＜二度の遣欧使節　⇒　二度とも譴責＞

私は得た地位の保身には走らず、自分のことよりも国家のことを考え、植民地にされないことだけを考えた。代々儒学を修めてきた家に生まれたものとしては当然の倫理であった。国益を考えて行動した結果、２度も職を解かれた。しかし短期間で復職をゆるされた。私利私欲で動いたのではなくて、国家のために思うところがあって動いたので評価されたと思う。

—●○●—

娘龍子に関して田邉太一はつぶやく。

＜三宅花圃＞

娘龍子が朔郎とその姉鑑子をモデルにして1888(明治21)年に「藪の鶯」を書いて明治の女性小説家の先駆者三宅花圃となった。薩長政府から外されて、福地源一郎等と鬱憤晴らしで遊興費がかさみ家計が苦しかった際、長男次郎一が死んだ。葬式代を稼ぐために龍子が頑張った。坪内逍遥の当世書生かたぎを見て、このくらいなら自分も書けると思ったそうだ。

＜樋口一葉＞

樋口一葉が娘龍子と同時期に萩の家にいた。龍子の藪の鶯をみて「このくらいなら私も書ける」といって書いた小説が一葉の処女作「闇桜」だ。娘もよいことをした。当時、鹿鳴館時代であり、舞踏会へしばしば行っていた。父親の私は元老院議官に外されて不満だったが、龍子が鹿鳴館では元老院議官の娘として立派にお役に立っていたのは嬉しい。

―●○●―
小栗上野介に関して田邉太一はつぶやく。
＜勝海舟対小栗上野介＞

江戸城において勝海舟と小栗上野介の間で無血開城の是非について徳川慶喜の前で大論戦が行なわれた。私も論戦に加わることを求められ、そのために目付に補された。厄介の身から将軍の前で論戦できる身分になったのだ。しかし感慨にふけっている余裕はなかった。私は小栗側について徹底抗戦を主張した。薩長が嫌いだったから。しかし最後は慶喜が断を下した。

―●○●―
薩摩に対する根強い不信感に関して田邉太一はつぶやく。
＜薩摩の卑劣なやり方＞

徳川昭武のパリ万国博使節に随行した。その際、薩摩は卑劣にも“丸に十字”の薩摩紋を掲げ、薩摩政府は幕府とは別であるとして欺瞞した。組頭の私は窮地に立った。伏見鳥羽の戦いでは偽の錦旗で徳川慶喜を欺瞞した。勝手なことをやった生麦事件で幕府に大迷惑をかけた。やり方がフェアーでない。長州のやり方は単純で許容できるが、薩摩は許せない。

＜慶喜はよく我慢した＞

徳川慶喜はよくやった。錦旗に礼をつくして江戸へ退散した。そして天皇に対して恭順を貫いた。もしも強力海軍を有する幕府が江戸城を死守する手にでたら、フランスとイギリスの代理戦争になった。そして本州は両国の殖民地に二分され、北海道はロシアが取った。沖縄と小笠原はアメリカが取った。これを防いだ徳川慶喜はノーベル平和賞の第一号受賞に値する。

＜岩倉使節団＞

幕府時代に薩長から、さんざんな目に合わされていたので、薩長の天下になったからといってすなおに言うことを聞く気にはなれなかった。とくに嫌いな岩倉具視を団長とし、嫌いな薩摩のトップ大久保が副団長をする岩倉使節団には協力したくなかった。しかし事務方がいないと訪問国との事前連絡や出張中の本国との連絡などが出来ないので引受けざると得なかった。

＜嘘も方便か＞

鎖国攘夷を旗印に掲げていた薩長は、幕府を欺瞞して倒すと、掌を返すように鎖攘など幕府を倒すための方便だよとうそぶき、諸外国に外務省を通じて発信した。うそも方便というが、許容できるうそにも限度がある。戦争にも戦時国際法といってルールがあるではないか。私は薩長の嘘は許容できない。その嘘を主導したのは薩摩だ。と、私は思っている。

―●○●―
ペリー来航と地震襲来に関して田邉太一はつぶやく。
＜安政一回目と二回目の大地震＞

安政年間に三度も江戸近辺に大地震があった。これは痛かった。第一回目は、1853年（嘉永6）年3月11日の小田原地震（M6.7、死者24名）。ペリーが浦賀に来航したのは、約4ケ月後の7月8日だった。二回目は一年後の1854年(安政1)年12月23日の安政東海地震（M8.4、死者2000～3000名）だった。下田に来航していたロシア軍艦ディアナが大破し、後に沈没した。

＜安政三回目の大地震＞

三回目は1855年(安政2)年11月11日の江戸大地震（M6.9、死者2000～3000名）。米国総領事ハリスが来日する前年だった。ペリーと日米和親条約を結んだ翌年、ハリスが下田に来る前年だった。この江戸直下型安政大地震は幕府にとって痛かった。太平の眠りを覚ましたのは、ペリーではなくて大地震だった。前後三回の大地震によって幕府の力が削減された。

—●○●—
兄孫次郎に関して田邉太一はつぶやく。
＜洋式銃砲の先駆者＞

長崎で育った高島秋帆は西洋の炸裂弾元込め式大砲”と“椎の実型鉄砲玉薬きょう式銃”が日本の“丸型砲弾先こめ式火縄砲/銃”よりはるかに大きな破壊力/殺傷力をもつことを知って愕然とした。そこで幕府に建議し、採用されて“徳丸が原”の実射演習を披露した。ペリー来航の12年も以前のことだった。秋帆の弟子兄孫次郎も演習に指揮官として参加した。

＜先駆者を潰す愚かな幕府＞

高島秋帆は幕府の中に巣くっていた因習姑息の輩の讒訴に会い、1842(天保14)年に長崎で逮捕/家名断絶となった。秋帆の弟子兄田邉孫次郎は、秋帆の志を継いで講武所を設立し、西洋砲術教授となった。惜しいことには、江戸に流行した麻疹に罹病して1863(文久3)年に死亡した。生きていたら薩長を凌駕する強力陸軍を育成したであろう。甥朔郎が幼くして家督相続した。

＜幕府には現金がなかった＞

幕府には大砲や鉄砲を買う現金がなかった。現金とは銀貨と金貨である。流通はしているが通過供給量が十分ではなかった。米本位制を守ってきた幕府に付けが回ってきたのだ。だから勘定奉行の反対に会って讒訴された。幕府にも悪人がいるものだ。一方、薩長は現金をもっていた。薩摩は密貿易、長州は関門海峡の通行料、肥前は陶磁器、土佐は樟脳によって稼いだ。

—●○●—
徳川幕府時代の高レベルな知的財産に関して田邉太一はつぶやく。
＜幕府の豊富な外国情報＞

ペリー再来航の際、吉田松陰が密航を企てた。拙劣な行動である。外国事情を知りたければ幕府学問所に来ればよいのに。長州藩には外国事情は入っていなかった。10年後に長州ファイブとかいって伊藤博文等が英国に密航して経験を積んでいたが、幕府の情報には太刀打ちできなかったのだ。吉田松陰の事件が当時の各藩藩士のレベルを物語る。幕府の情報量は豊富だった。

＜徳川家兵学校＞

幕府陸軍のレベルの高さは、幕府が静岡藩70万石に下った際に沼津に設立した「徳川家兵学校」で証明できる。兵学校の生徒が先生格「お貸し人」として各藩から引っ張りダコだった。薩摩にも大勢貸したが、長州からは依頼はなかった。幕府と最初に戦った長州人の自尊心と意地っ張り振りが伺われる。あるいは大村益次郎率いる長州軍は本当にレベルが高かったか。

—●○●—
自分の持論に関して田邉太一はつぶやく。
＜もうひとつの幕末＞

ペリー来航はオランダ人を通じて一年前から分かっていた。だから国是を開国と定め、そのための港湾の準備をし、ペリーが来たときにそのことを通告すればそれで何事もなかった。そうすれば貿易で現金を稼ぎ、小栗上野介の路線にしたがって軍備増強して別の形の幕末があった。阿部正弘が無策のまま朝廷に伺いを立てたものだから、薩長に付け込まれた。

＜横浜開港で現金稼ぎ＞

勘定奉行小栗上野介は、現金がないと最新式武器の購入ができないことをよく知っていた。だから阿部正弘が幕府直轄地に限って“開港”と国是を定めて諸藩に通告すれば、それでよかった。開港地に貿易市場を開いて税金を徴収し、幕府自らも貿易して現金を稼ぎ、江戸城の金庫を豊かにする。これを背景にして英国/フランスから武器を購入することができた。

―●○●―

自分の生い立ちに関して田邉太一はつぶやく。

＜田邉家は代々学者家＞

私は三河譜代の田辺家、儒学者田邉石庵の次男に生まれた。父は昌平坂学問所の教授から、甲府徽典館の学頭となり、甲府勤番幕臣師弟の教育を受け持った。石庵の養祖父田邉貞斉も学者であり、江戸名家墓所一覧に記載されている。浅草本願寺（後の東京本願寺）に、六代遡った田邉菊忠から父田邉石庵まで埋葬されている。

＜伝説の祖先＞

紀州田辺の熊野別当堪僧、即ち田邉堪僧が祖先だといわれている。堪僧は熊野水軍をもっていた。そして源平合戦において源氏に加勢して壇ノ浦の大勝利をもたらした。堪僧の祖先は歌人藤原定家である。よって田邉家の氏が藤原である。鎌倉幕府が開らかれた際、田邉堪僧の子孫が鎌倉にはせ参じ、室町、戦国を経て徳川の御家人になったと伝承される。

＜父親の素性＞

父石庵は尾張の人であり、元は村瀬誨輔といった。徳川尾張藩の藩校明倫館において秦鼎に漢学を学んだ儒者だった。村瀬の名で上梓されている書籍が少なくない。後に江戸に遊学した際、雑学者田邉貞斉に養われて田邉姓に改めた。頼山陽と親しく交友があり、彼が日本外史を書くときに、父石庵に種々の調査依頼をし、その問合せ書簡が甥の朔郎家に保管されている。

＜甲府代官の娘と結婚＞

父石庵は幕府の昌平坂学問所の教授方出役となった。程なくして幕府直轄地甲斐の国の学問所、甲府徽典館の学頭となった。15歳の私は父に誘われて徽典館へ同行した。後年教授になった。この時の縁で清兵衛の娘己巳子と結婚した。己巳子の兄は、荒井郁之助であり、以後戊辰戦争まで共に幕府のために働いた。親戚縁者の絆で世の中を動かしたのだ。

＜幕臣への道＞

徳川幕府の幕臣は世襲制だった。儒学者の家、俸禄200石の家に生まれた私ではあったが、兄の家籍に属する「厄介の身」だった。だから私には身分取り立ての機会は本来皆無だった。次男以下が徳川の家来、即ち幕臣になるには、子のいない幕臣と養子縁組するしか道はなかった。しかし私は自力で幕臣になった。幕末動乱の世だから可能だった。

＜幕府海軍伝習所入学と語学＞

私は甲府徽典館の教授を辞めて長崎に行き、幕府の海軍伝習所に入所した。私は三期生だった。ここでオランダ海軍から派遣された教授達に航海術、造船学、機関学、算術等をオランダ語によって習ったが、内容よりも習ったオランダ語がその後大いに役立った。後、外国との交渉のため、必要に迫られて英語とフランス語をマスターした。清国とは筆談で苦労はしなかった。

© 2011 Y. Tanabe